



橋村りかが訴える「だれも取り残さない社会」

菊陽町、益城町2日間の街頭演説より

あなたが生きていること、それ自体がこの社会の希望

社民党副党首・熊本県連合副代表の橋村りかは9月16日(菊陽町)、17日(益城町)の両日、朝の定例街頭演説に立った。直近に行われた沖縄県知事選や、ある若者との対話、そして自ら足繁く通う地震被災現場での実体験を通じ、「自己責任」を強いる社会構造の歪みを鋭く指摘。「どんな立場にあっても、生きていること自体を尊重し合える社会」の実現へ向け、力強いメッセージを地域市民へ届けた。両日の演説から、橋村の真摯な決意と情熱あふれる言葉を報告する。

■「国益」の名の下に強いる従属への 危機感 — 沖縄知事選(9/16菊陽町)

演説の冒頭、橋村は9月に投開票が行われた沖縄県知事選に触れた。古謝玄太候補の応援演説の場で語られた「暮らしを豊かにすることが国益にかなう」「言うことを聞けばお金を出す」といった言葉に強い違和感を覚えたという。

「その言葉を聞いたとき、私には81年前の沖縄戦で『国のために命を捧げろ』と捨て石にされた沖縄の人々の姿が重なって見えました。戦中・戦後を通じて自由と人権を奪われながらも、『生きるとは何か』を問い続けてきた沖縄の人々に、私たちは本当に隣り合い続けられたでしょうか」

自ら家族で巡った沖縄の「アブチラガマ(自然洞窟)」での惨状にも想いを馳せ、「お金や利益と引き換えに『中央の言うことを聞け』と強いるやり方は、本当の自由でも人権でもない」と、国家中心主義政治の危険性を強く訴えた。

■「なぜ勝者は自分に投票した人にだけ 報いるのか」 — 若者の問いかけ(9/17益城町)

翌17日、益城町の交差点に立った橋村は、前夜に大学3年生の若い仲間と交わした長電話のエピソードを紹介した。休学して各地で学びを深める彼女は、選挙後の政治家の姿勢に素朴な疑問を投げかけたという。

『どうして当選した人は「自分に投票してくれた人に報いる」と言うのでしょうか。自分を選ばなかった人の想いや批判にこそ耳を傾けるのが、本当の民主主義ではないでしょうか』

この問いに深く共鳴した橋村は、「自分に都合の良い相手ばかりを向き、批判や異論に心を閉ざす政治が、この国の衰退を招いてきたのではないかと」応じた。「自分を選ばなかった人々の思いを心に刻んでこそ、本当の民主主義と言える。政治の姿勢そのものを市民の手に取り戻さなければならない」と力を込めた。



■ 声なき声の奥にある

「諦め」と「自己責任」の猛威

菊陽町・益城町の両演説で共通して語られたのは、熊本地震の被災現場を訪問する中で直面した被災者の「心の深層」だ。

ボランティア活動でお住まいを訪ねると、最初は「もう十分です」と遠慮していた被災者が、時間をかけて対話を進める中で「実は地震の前からずっと苦しかった」と本音を漏らす。

「頑張れる人、お金を稼げる人だけが称賛され、頑張れない環境にある人や心身を痛めた人には『自己責任だ』『声を上げないのは困っていないからだ』と冷たく突き放す。苦しいと声を上げる余裕すら奪われているのが、今の社会の現実です」

橋村は、人々から気力や希望を奪っていく現在の社会構造を変革する必要性を訴えた。

■ 「インクルーシブな社会」の構築

— 誰も取り残されない共生へ

社民党内で「インクルーシブな社会をつくるプロジェクトチーム(PT)」を立ち上げた橋村。「言葉は難しく聞こえるが、要するに『誰も取り残されることなく共に生きる社会』のこと」と分かりやすく解説した。

「障害の有無、子ども、女性、高齢者、病気を抱える方、外国籍の方。この社会で『自分は生きていていいのだろうか』と孤独を抱えている人にこそ、政治が徹底して隣に寄り添い、声を聞き届けていく。小さくなった党だからこそ、一人ひとりの声に徹底的に耳を傾けることができるのです」

■ 学童保育の現場から考える

「教育の敗北」と「真の豊かさ」

学童保育の現場で小学生と接する日常から、橋村首は「他者を傷つけても『面白いと思ったから』と答えてしまう子どもたち」や「興味本位で犯罪に走ってしまう若者たち」の背景にある「教育の貧困」「心の貧困」へ警鐘を鳴らした。

「人を傷つける悲しい生き方を子どもたちにさせたくない。『あなたが生まれてきてくれたこと、この世界にいてくれることが一番の希望なんだよ』と、私たち大人が全身で伝え続けていく必要があります」高市首相が掲げる「強く豊かな社会」が、能力主義や軍備拡張を指すのであれば真っ向から異を唱える。「本当の強さ、豊かさとは、自衛のために他国を牽制することではなく、弱さを抱えた人々を誰も取り残さずに支え合えることだ」と強調した。

■ 軍拡ではなく「命と暮らし」へ

税金の投入を

益城町の演説では、相次ぐ大規模災害の中で苦しむ被災者の実態に言及。「壊れた自宅の車庫や冷房のない場所で耐え忍ぶ人々がいる一方で、国家は『新しい戦い方』と称して人を殺めるための武器購入に巨額の税金を投じようとしている」と批判した。

「命を奪うための武器を準備するくらいなら、今まさに被災地で『明日どう生きていこう』と悩んでいる方々や、教育・福祉の現場へ税金を使うべきです。税金は私たちの命と暮らしを守るためにこそ使われなければなりません」



■ 主権者である私たちがつくる未来

両日の演説を締めくくるにあたり、橋村は胸に掲げた手作りの「主権者」のタスキを示しながら、集まった聴衆へ熱く呼びかけた。

「子どもたちには『生まれてきてくれてありがとう』、高齢の方々には『社会を支えてきていただいてありがとう』と胸を張って言える社会をつくりたい。政治を変えるのは政府や国会議員ではありません。主権者である私たち一人ひとりです。『ここに生きている人間の声を聞け』と、皆さんと共に国政へ声を上げ続けてまいります」

温かい拍手と声援が送られる中、橋村は市民一人ひとりと固い握手を交わし、街頭宣伝活動を締めくくった。

【取材者の目】

「命の尊厳」を軸に貫かれた2日間の訴え

菊陽町と益城町で行われた2日間の演説を通して、橋村の主張の根底には一貫して「一人ひとりの命と尊厳を尊重する」という強い情熱が感じられた。沖縄知事選の歴史的背景から被災現場のミクロな声、学童保育での子どもたちとの対話に至るまで、すべてのトピックが「自己責任論への疑問」と「共生社会への転換」という主題に収斂されていた。読者の皆さんに、党の理念・橋村の想いをわかりやすくお届けするために、1号にまとめて報告した。



「子どもたちには
『生まれてきてくれてありがとう』、
高齢の方々には
『社会を支えてきていただいてありがとう』
と胸を張って言える社会をつくりたい」



社民党副党首
社民党熊本県連合副代表

橋村りか